

# 乳幼児の事故に関する事例的研究

岡本善之（麻布大学教養部）

## 〔研究目的〕

乳幼児の事故の実態を事例的に捉え、事故予防、安全管理、安全指導に資することを目的とする。

## 〔研究方法〕

家庭における乳幼児の事故の実態、保育施設における事故の実態を事例的に調べ、事故の背景、事故の原因等につき、次のような観点から考察する。

1. 家庭における乳幼児の事故
  - 1) 事故事例
  - 2) 事故の背景と原因
  - 3) 母性的行動要因との関係
2. 保育施設における乳幼児の事故
  - 1) 認可保育所における園児の事故
    - a) 事故事例
    - b) 事故の概況と負傷・疾病発生率
    - c) 事故の背景と原因
  - 2) 無認可保育施設における乳幼児の事故
    - a) 無認可保育施設の実態
    - b) 事故事例
    - c) 事故の背景と原因

## 〔これまでの研究の概要〕

上記のような研究目的、研究方法によって、これまでに次のようなことをまとめてきている。

1. 母親の育児行動に関係する要因について——テーブル化の試み——

事故防止のためには、乳幼児の環境としての母親の危険予知能力と危険回避・除去能力が高く、また安全管理・安全指導がきめ細かく行われることが何よりも必要であるが、そのためには母親の育児意欲が高く、育児行動が適切でなければならない。このような観点から、母親の育児行動に関係する要因について調べた。そして、妊婦は、初妊婦でも、高リスクの乳児の泣き声に対する反応が高まる等、乳幼児の事故（防止）と母親の状態（育児意欲・育児行動など）との関係について考察する。

## 2. 保育園児の負傷・疾病発生率について

全国的に保育園児が減少している中で、園児の負傷・疾病発生件数および発生率は増える傾向がある。どうしてこのようになるか、について考察した。（表1，2，3）。

このようになる原因としては、いろいろなことが考えられるが、主なものとしては、次のようなことがあると思われる。①医療機関の普及等によって治療が受けやすくなっていること。②大事をとって医療機関での治療を受けることが、後遺症やトラブル防止のためにも必要とするため。③園児の協応動作等が低下しているため（転倒のとき、手がでないで、顔面制動になってしまうなど）。④園児の低年齢化（保育園児の年齢構成は、3，4，5歳児の割合が低くなり、0，1，2歳児の割合が高くなる傾向がある）。⑤園児の生活リズムの乱れ（保護者の生活リズムに合わせるため、夜型となり、昼間はぼうっとして、注意力散漫、ヴィジランスの減衰がみられ、事故にあいやすくなる）。⑥身体の調子がよくない園児や十分に病気から回復していない園児の登園（微熱があっても連れてきたり、薬で発熱や下痢を抑えたりした状態で登園するなど）。⑦園舎・園庭などのハード化（園舎・園庭などが木、土などの軟材質から、コンクリート、鉄、アルミなどの硬材質になってきている。このため、はさんだり、転倒などすると大怪我になったりしやすい）。⑧施設・設備の立体化・高密度化（平屋から2階建，3階建，更に屋上の利用などのため、階段での事故などの増加、また、備品、教材・教具の過密化などにより、空間の減少等となり、衝突などの事故が起きやすくなっている）。⑨保育日数の増加傾向・保育時間の延長化（一般に保育日数が増え、保育時間が長くなる傾向がある。このため、長時間の集団保育による園児の疲れ、保育者の交替制などによる保育の一貫性の減少がみられ、事故の発生につながりやすい状態となる）。⑩家庭の育児能力の低下（基本的なしつけなどができていないため、落ち着きがなく、勝手な行動をとったりして事故にあいやすい。また、すぐにかみついたり、物を投げたりして他の園児に怪我をさせるなどしやすい）。⑪園周辺の環境の悪化（車の増加、遊び場の減少、かんやビンの投げ捨てなど、このため登降園や園外保育のときなど事故にあいやすくなる）。⑫保険のパラドックス（給付制度や賠償保険等の充実等によって、かえって緊張感が低下してしまったりすること）。⑬保育者養成上の問題（養成校においても、

現職教育においても、事故・安全に関する教育が不足していることが多いこと)。⑭保育者の問題(高齢化, マンネリ化, マイホーム主義化など)。⑮病児保育, 障害児保育などの増加(病児や障害児は, 事故にあいやすい場合が多い)。⑯保育者の行事参加や研修などの増加傾向(このため, 時には保育者が手薄になることがある)。⑰マルチ・マザー化(保育者の労働時間の短縮化, 休暇等の増加などが, 同一保育者による保育を相対的に少なくし, 園児は多くの保育者にリレー式に保育されることになる。このため, 安全行動の学習などで一貫性が保たれにくくなっている)。⑱コンバージェント・クラスター化(保育所は管理職のいない, 女性だけの職場となりやすく, 緊張感低下, リーダー不在, 責任者不在のような状態になりやすいなど)。⑲園児の発熱などのとき, 保護者がなかなか迎えにこられない場合があること(仕事から離れられない, 外勤のため連絡不能, 勤務先が遠い, そのまま園でみてほしいなどのため)。⑳保護者管理下の事故の公的給付申請(登降園時の事故の他, 家庭で起きた事故も給付申請するなど)。㉑保護者の園依存化傾向(安全教育は全生活を通じての全人教育であるが, 保護者が園に臆, 教育などをまかせきりにする傾向がある)。㉒保育内容の拡大化傾向(園バスの運行, 園外での予防注射や通院治療への保育者の付き添い, お泊り保育や花火大会, 観劇や遠足など園外での行事の増加傾向などのため, いつもの保育園内の環境とは異なり, 安全管理などが難しくなるなど)。

#### 【今後の予定】

62年度中にまとめられる範囲で今後は更に各方面からの研究をすすめ, 上記の研究目的を達成する予定である。

表1 保育園児の負傷・疾病発生件数及び発生率

昭和年度	53	54	55	56	57	58
発生件数	29,846	29,439	30,326	32,806	36,443	36,402
発生率	1.8	1.7	1.7	1.9	2.2	2.2

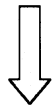
表2 保育園児の障害件数

昭和年度	53	54	55	56	57	58
件数	17	33	24	30	26	16

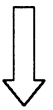
表3 保育園児の死亡件数

昭和年度	53	54	55	56	57	58	59
件数	11	12	6	11	5	15	7

〔 表(1), (2), (3)とも、日本学校健康会の資料（日本学校健康会「学校の管理下の災害——10」1986, 同「学校での事故の事例と防止の留意点——死亡・障害——昭和61年版」1986）に拠り作成。 〕



**検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用  
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



〔研究目的〕

乳幼児の事故の実態を事例的に捉え,事故予防,安全管理,安全指導に資することを目的とする。